

# 越中八尾おわら歌碑 《いにしえの文化人との交流》

料理旅館 北吉前（8／26）



踊り踊るなら

しなよく踊れ

おわら踊りの

オワラ しなのよき

森田 たま

※旧『日進楼（にっしんろう）』  
明治十七年創業。数少ない政府公認の高級料亭として、「鏡遊郭」と呼ばれた花街時代から唯一現在も営業を続ける老舗割烹旅館。多くの文人に愛され、芸事の学びの場、商談の場として利用されてきた。

森田たま（もりたたま）  
小説家、随筆家、政治家。北海道の女流作家第一号。本姓村岡。明治二十七年、運送会社の子として北海道札幌市に生まれる。大正二年、森田草平（夏目漱石の門下生の一人）に入門。昭和三十七年、参議院議員（一期）となる。  
代表作に「もめん随筆」「石狩少女」などを刊行。

杉風莊前（9／26）



恋の礫か窓打つ霰  
開けりや身にしむ

オワラ 夜半の風

水田 竹圃

水田竹圃（みずたちくほ）  
日本画家。明治十六年、大阪府大阪市に生まれる。本名忠治。別号に満碧堂、積翠堂、水竹居、蟻池庵などがある。南画や漢学を学び、中国を巡遊し、帰国後に名声を高めた。  
代表作に「一普陀」「三峡」「秋声」「残照」「月光」など。

※旧『杉下楼（すぎしたろう）』  
明治十八年、東町で始めた隆雪亭という料亭が、明治四十年頃に鏡遊郭（後述参照）に移り「杉下楼」と改名。名前の由来は、当時、家の傍らに大きな杉の木があったことから。鏡遊郭を代表するお店の一つだった。

なのはな農協前(10/26)

おたや地蔵さん

この坂下は

今宵なつかし

オワラ月あかり

野口雨情



料理旅館 北吉前

杉風荘前



なのはな農協前



小杉放菴作『八尾四季』碑



# 【補足】鏡遊郭とおわらの発展

八尾町にある鏡町は、かつて花街と呼ばれていた。鏡遊廓となる鏡町新建地区は、明治三十三年の制度発足に伴い交付された「貸座敷の免許地区域の指定」により遊廓免許地としての指定を受けている。昭和初期の鏡町繁盛図では、芸娼妓とお客の遊興場所とされる規模の大きい料理屋や小料理屋が軒を連ね、一大花街となった。

鏡遊郭は、吉原のように障壁や掘で囲んだ、いわゆる廓くるわ構造の遊廓とは異なり、出入りのルールはあったが物理的な境界がなく、どこからでも出入りはできた。おたや階段の上には遊廓の入り口を示す門柱が立っていたが、あくまで約束としての入口でありシンボリックなものだったと考えられる。この鏡遊郭は、おわらの歴史を作り上げた文化人や芸術家たちの文化的サロンになっていた。

全盛期である昭和初期の鏡遊廓の様子や町民との関わりとその文化について、当時の随想が残されており、随想の最後はこう締めくくられている。

この時、長谷川剣星二十三歳、林秋路二十六歳、小谷契月二十七歳。

八尾に鏡町遊廓の制度と姿が続いていた幾年の間に、八尾の人間社会、男女の人生観に幾千億の恋情となまめかしさの色模様を描き込められたことだろう。

明治生まれの八尾町民の者どもにとっては断ち切れない余情となっている。

言わば、永遠に籠め続けられて行く八尾の余韻というものであろうか。



鏡町記念誌「鏡町のあゆみ」昭和初期の鏡町繁盛図より  
(日進楼は正しくは日新楼)

▲昭和初期の鏡町繁盛図より



一般社団法人  
富山県民謡越中八尾おわら保存会  
「おわらと鏡遊郭」は  
左のQRコードから

[http://www.owarazonkai.jp/data\\_cate.html?cate\\_id=15](http://www.owarazonkai.jp/data_cate.html?cate_id=15)